

## WFITN (World Federation of International Therapeutic Neuroradiology) 2019

田上秀一

WFITN 2019 に参加させて頂きました。

WFITN (World Federation of International Therapeutic Neuroradiology)は、2年ごとに世界各国で開催される脳血管内治療の学会です。第15回開催となる今回はイタリアのナポリで2019年10月21-24日の期間で開催されました。本学会は、治療技術やデバイス、画像診断技術の発達と普及とともに急速に発展している脳血管内治療分野において、その基本的知識から最新の知見を発表、共有することを目的とするとともに、若手医師や看護師、放射線技師、各種関連企業との情報の共有にも重きをおいた学会となっています。

今年の開催は観光都市であるナポリでの開催であり、約1500の参加者が集まり、また学会からの参加の働きかけと次回のWFITN2021@京都への盛り上がりもあって多くの日本人からの参加もありました。本学会のプログラムは、1日目がstroke、2日目がAVM/DAVFのplenary sessionと一般口演、3日目spinal AVMのplenaryと動脈瘤の一般口演、4日目にAneurysmとテーマごとに分けられていました。Strokeのセッションは近年の急性期虚血に対する機械的血栓除去術の有効性の確立とデバイスの進歩もあり非常に活発な討論がなされ、また動脈瘤のセッションでは半分近くをflow diverterの内容が占めるというもので、近年の治療の主流が確実に変化しているということを感じさせる内容でした。その他のAVM/AVF、spineのセッションも多くの発表と盛んな討論がなされました。

私自身は日本脳神経血管内治療学会のサポートを経て、椎骨動脈解離性動脈瘤に関する多施設共同研究をさせて頂いた際の結果の一部を報告させていただきました。椎骨動脈解離性動脈瘤は本邦に多く見られる疾患で、破裂した場合の治療にはコイルによるtrapping術が施行されてきました。再出血の予防効果は確実である一方で、術後に発症する延髄梗塞が問題視されていました。延髄梗塞は椎骨動脈から分岐する微細な穿通枝の閉塞によって発生しますが、本共同研究では、本学も含めた日本の複数施設での治療後の延髄梗塞発生頻度と同定される穿通枝や塞栓部位との関係、trapping術と近年普及しつつあるstent併用coil塞栓術で椎骨動脈を温存した場合の梗塞発生頻度の比較、さらに正常例での穿通動脈の描出能を検討しております。私の発表は正常例での3D DSAを用いた穿通動脈の描出とそのバリエーションを検討したもので、過去に解剖体で検討されてきた結果と同様の所見、さらに後下小脳動脈の分岐パターンとの関係を報告させて頂き、今後の治療戦略の決定に参考となる結果が得られるものと考えております。その内容は英文雑誌に投稿中です。

学会中には観光も少し楽しませて頂きました。“ナポリを見て死ね”という言葉があるように、ナポリはベスビオ山と湾に面する丘陵地に栄えた都市で非常に美しい街です、学会場とはやや離れていましたが、サンタルチア地区に宿泊させていただき、海岸沿いを早朝や夕刻に散歩するだけでも非常に心地よい気分になれる場所でした。また近郊には火山に埋もれた都市であるポンペイや、美しいカプリ島、アマルフィ海岸があり、観光する場所も豊富

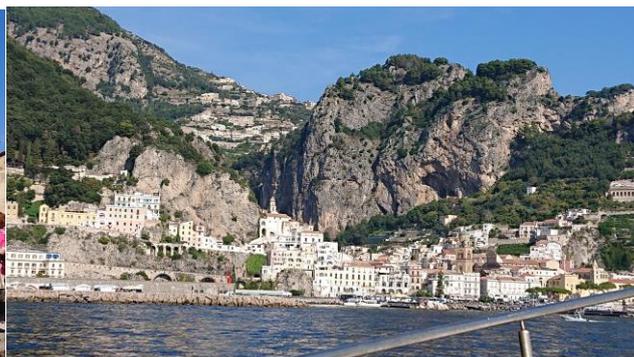
です。今回は列車でのポンペイ訪問、またフェリーを乗り継いでのアマルフィ海岸観光も楽しませて頂きました。食材も、地元で採れる魚介類をはじめ、当然のごとくピザやパスタ、ワインも美味しく、毎晩のように他大学のメンバーとの食事を楽しませて頂きました。滞在期間を通して、ややタイトなスケジュールでしたが、発表、勉強、観光と充実した日々でした。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった安陪教授をはじめ、他の教室の先生方に感謝いたします。



会場エントランス前にて



一般口演での発表時の様子。



ポンペイの町並み（左）と船上からのアマルフィ海岸（右）



魚介の盛り合わせ（食べかけですが…）